

コロナ下の中学生

コロナ前とコロナ後をまたぐ3年間

三郷市立南中学校
岩田 彦太郎

はじめに

コロナ前の2019年4月に入学した生徒たちがこの3月に卒業した。コロナ前の学校生活を約1年間過ごし、学年末を控えた2020年2月末に「全国一斉臨時休校」となり、2020年6月の学校再開、分散登校を経て、コロナ後の中学校生活を終えたこの学年の生徒たちのあゆみから、コロナが中学生の学びに何をもたらしたか、その中で教職員は何を願って実践にあたってきたかを振り返る。

やる気いっぱい、 1年生のスタート

学年のスタートにあたって学年職員で話し合ったのは、生徒の主体性を育てよう、ということであった。そのために生徒の活動の場を保障し、教師がはじめから指示・命令するのではなく、生徒が物事を主導していくように指導しよう、という方針を確認した。

実際に入学してきた生徒たちは、やる気と元気いっぱいの生徒たちだった。1学期の日帰りの校外学習の取り組みを通じて、それは大いに発揮された。学級委員会を中心にスローガンを討議によって決定し、当

日の持ち物も学級討議を経た上で、学年総会で決定した。当日は班ごとにカレライスづくりを行うなど、和気藹々とした雰囲気の中にも、時間や自分たちで決めたルールを守ろうと声を掛け合い、協力する姿が随所で見られた。上々のスタートを切った1学期であった。

主体性が大きく伸びた学校行事 「南中祭」

「南中祭」は、学年ごとに総合的な時間などを通じて学んだことを合唱やナレーション（呼びかけ）で表現する行事である。1年生は「人はなぜ学ぶのだろう」をテーマとして掲げ、発表づくりに取り組んだ。シエラレオネの少年兵のことや、夜間中学で学ぶ人々のことを学び、一人一人の生徒が考えたことを文章化し、それをもとにシナリオを作成して発表をつくった。この取り組みでは、多くの生徒が積極的に役割を自ら買って出て、仲間と試行錯誤しながらよりよい発表にしようとよく努力した。

初めての宿泊行事・スキー教室

3学期には、初めての宿泊行事となるスキー教室を実施した。ここでも生徒たちがスローガンを討議によって決定し、持ち物

の決まりも学年総会で決定した。また、生徒による企画運営で行う学年レクを2泊3日の中に2回行った。ここまでの取り組みによって、学校行事は生徒が自分たちの主体的な話し合いや行動によってつくるものだということが浸透した。

突然の臨時休業

スキー教室を成功裡に終え、生徒たちに目標を持たせて進級を迎えさせようと進んでいた2月末、突然の「全国一斉臨時休校」がそのあゆみを止めさせた。学校からは生徒の姿が消えた。休校中は定期的な家庭訪問や「時間差自由登校」を実施し、なんとか教師と生徒の関係をつなごうとした。

2週間の分散登校からの学校再開

6月、学校は2週間の分散登校から再開した。初めて経験する20人の少人数学級。やはり、一人一人の生徒に本当によく目が届くという実感があった。しかし一方では、どうにも打ち解けない生徒たちの姿もそこにあった。長い休校というブランクに加えてクラス替えもあり、生徒たちは異様な緊張感を持っていた。ようやく全員が一堂に会することとなった通常再開の日、明

らかに生徒たちは全員がそろった環境に安心し、興奮気味でもあった。

しかし、再開された学校生活は、生徒同士の接触が厳しく制限されるなど、たくさんの制限のもとで進むこととなった。酷暑の7月31日までとなった1学期には学校行事は皆無、ただ淡々と教科の授業だけが進んでいく日々となった。

少しずつ動き出した2年生2学期

8月18日という異例の早い時期に始まった2学期は、まさに何ができるかを手探りで模索する学期となった。10月には、大幅に規模を縮小しつつも全校生徒が一堂に会する形で「特別な運動会」を実施した。たった授業2コマ分の行事だったが、生徒たちは大いに楽しんだ。そして、やはりこの行事を通じて、生徒同士の関わりが深まった。

総合的な学習「SDGsと私たち」

例年実施していた「南中祭」は中止となった。そんな中で、「SDGsと私たち」をテーマとした総合学習を立ち上げた。「ハンガーマップ」から学ぶ授業やユニセフの「命のメジャー」体験などを行って意識を高めた

後、個人でテーマを決めて調べ学習を行った。調べ学習の仕上げとして、個人で学んだことを相互に発表し合う発表会を行った。この発表会に、生徒たちは大変積極的に取り組んだ。自分が調べたことを分かりやすく伝えるにはどうしたらいいかをよく考え、工夫した発表を行う生徒が多かった。しかし、「何かが足りない」という感覚が拭えなかった。

表現活動の取り組みへ

この時期、学年会で生徒たちの現状を話し合っただけでは生徒の自己肯定感を高揚させるにはまだ足りない、もっと生徒たちの活動の場を設定する必要があるという認識を共有した。そこで論議しながら立ち上げた新たな取り組みが、表現活動である。これは、学年生徒がダンス、ナレーション、アート3つのチームに分かれて、総合的な学習で学んだことを表現するというものである。たくさんさんの時間をかけてそれぞれ発表の準備をし、年度末の3月下旬に授業3コマ分を使って行った。学年生徒全員が1回はステージに上がり、みんなの前で発表した。多くの生徒が人前で発表することに大変緊張して臨んだが、同時にそれは大きな達成



被爆体験を語る久保山榮典さん



熱心に聞き取る生徒たち

感をもたらしした。

3年生総合

「戦争と平和を考える」

3年生では総合学習のテーマを「戦争と平和を考える」として取り組みを進めた。特筆すべきは、八潮市在住の久保山榮典さんをお招きして、被爆体験をお話しいただいたことである。事前学習に時間をかけたこともあり、当日、生徒たちは久保山さんのお話を熱心に聞き取っていた。

聞き取り学習 「戦争中の記憶」

夏休みには、身近な方に戦争中の記憶を聞き取る課題を設定した。戦後76年、しかもコロナによって対面での対話のハードルが高くなったことも大きく影響し、身近な方に対面で聞き取りをすることができた生徒はかなり少数であった。多くの生徒がNHK戦争証言アーカイブスを活用してのレポート作成となった。しかし、そんな中でも自分とつながりのある方の戦争体験に出会った生徒もいた。2学期に入ると、それぞれの聞き取りについてクラス内で発表会を行った。多くの生徒が資料に工夫を凝らして自分が聞き取った体験を伝えようと努

力していた。

表現づくり

「南中祭」に向けて

前年度の「表現活動発表会」のような形で、「南中祭」を実施した。ここまでの学習を通じて考えたことを、シナリオ化してパワーポイントを活用して発表する「ナレーション」と、平面または立体の作品として個人で表現する「アート」のどちらかを生徒が選択し、作品作りを進めた。

南中祭当日は、まず、体育館全体にアート作品を展示し、鑑賞する時間を取るところから始めた。

その上で、ナレーションの発表を行った。また、アートについては、作品を写真に撮ったものをスクリーンに映しながら、作者一人一人がステージ上で、作品に込めた思いを話す発表形式とした。前年度の表現活動発表会がそうであったように、全員がステージが上がって発言する場を持つことにこだわった。

生徒たちの表現力と個性には目を見張るものがあった。特別支援学級を担任している大ベテランの美術の先生が、作品を参観して、「感動しました。確かに美術としての技巧は教わっていないから稚拙だけれど



3年生「南中祭」アート作品鑑賞



3年生「南中祭」ステージ発表の様子

も、一人一人の生徒が、自分なりに戦争とはどういうものかをしっかりと受け止めていることがよく伝わってきました。」と感想を述べてくれた。

おわりに

この学年の生徒たちは、コロナ前の中学校生活を約1年経験し、中学校生活のど真ん中を臨時休校や分散登校といった異常事態の中で過ごした。コロナ前を知っているだけに、常に物足りなさを感じながら生活していた。その物足りなさは、お互いに関わりを深めることがなかなかできないもど

かしさや、協同して表現する充実感を味わえない「つまらなさ」として現れていたように思う。だからこそ、その物足りなさを少しでも埋めていくために、限られた条件下でどんな活動ができるのかを、学年職員は考えてきた。そのもがきによって生み出されたのが、このような実践であった。学年としてこだわったのは、全員が表現者となって、仲間の前に立って自分の言葉で表現することであった。その「表現」をつくり出すためには、生徒自身の中に、「伝えたい」という芽生えが必要である。戦争の事実を実感とともに学んだことが、より詳

しく学びたいという意欲につながり、生徒たちはそれぞれに何かを表現しようとしたのだと思う。戦争の事実を知り、平和について考えるという学びは、生徒の中に、何か言いたい、伝えたいと思わせる本質があるのだと思う。

学校は、生徒同士が人間的な共感を生む場として機能する必要があると思う。そのためには、ともに意見を言い合ったりしながら学ぶ過程が不可欠である。そして、考えたことや感じたことを表現しあう活動を行うことで初めて学びは完結するのではないかと思う。